

## [033] 史淵表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/2339088>

---

出版情報 : 史淵. 33, 1945-03-10. Faculty of Law and Letters of the Kyushu Imperial University  
バージョン :  
権利関係 :

## 彙報

### 還暦の壽を迎へられた

#### 重松俊章前教授

重松俊章前教授には昨昭和十八年十一月を以て還暦を迎へられ、十九年九月を以て停年制の申合せにより惜まれつつ九州帝國大學教授の職を退かれた。同時に本會育ての親として長年御盡粹下された常任委員をも辭せられたが、新に顧問として今後引續き本會發展の爲めに御盡し下さることとなつてゐる。

先生は大正二年七月、東京帝國大學文科大學東洋史學科を御卒業、同年九月大學院に入り研究を進められる傍ら、豊山中學校歴史漢文科擔任教諭となられ、同七年六月豊山大學教授に御昇進、更に同九年六月松山高等學校に任ぜられ、共に歴史科を御擔當、同十四年十一月東洋史學研究の爲中華民國に留學せられ、御在留一年餘、昭和元年十二月歸朝せられ、翌二年十一月迎へられて九州帝國大學東洋史學講座擔任の教授となられ、爾來御退官迄十七年の長きにわたつて御在職せられた。此の間、先生の盡された文功は洵に大なるものがあるが、先生が最も力を注がれたのは創設直後に於ける學府の基礎を固め内容を充實發展せしめられることに在り、先づ同志と相諮つて本會を興しその發展に専念せられ、又支那學會を創め、共に學術の進歩、後進

指導の有力機關とせられた。又或は九大辯論部長として克く學生を善導せられ、日支事變の勃發に際しては中國留學生の特に多い九大の特殊事情に鑑み彼等を會して聖戰の眞義を説き日支協力の勉學精進を鼓舞せられ、又昭和五年より六年にかけて評議員として九大の樞機にも參劃せられてゐる。

御專攻の東洋史學には大學卒業以來三十餘年その熱情を傾けて拮据倦むことを知らず、時間的空間的に殆んど深廣無邊とも云ふ可き東洋史學界に縱横の足跡を印せられ、或はエフタル族を究明して所謂西域史上の難問を解決せられ、或は古代東亞諸民族の殉死、觸體飲器等の習俗を解明して民族學に多大の貢獻をせられ、或は又古代中世の日鮮滿支諸民族の相互關係を考察して東亞共榮の歴史の根據を示され、尙その他にも社會經濟思想史等に關する貴重な論文を發表せられてゐるが、就中、支那の邪教史は先生が最も關心を寄せられた所で、「宋元時代の白雲宗門」「唐宋時代の彌勒教匪」「唐宋時代の末尼教と魔教問題」「宋元時代の紅巾軍と元末の彌勒白蓮教匪に就いて」等珠玉の論究尠く無く、邪教史の新分野は全く先生の開拓せられる所で東洋史學史上の不滅の功績と云ふ可きである。昭和八年一月より同十年三月迄、二箇年に亘つて佛獨に留學せらるるやその學識益々博洽を加へられ、又常に歴史を現狀に立脚して觀察す可しとする持論を抱懷せられてゐた先生は、昭和五年七月より月餘にわたつて中華民國に出張せられ、滿洲事變前の激動する大陸の情勢を視察せられ、又昭和十三年七月、十四年八月、十六

年二月にも各々月餘にわたつて滿洲國及び中華民國に出張して日支事變後の大陸の情勢を視察せられ、以て史眼を益々研磨せられ、正に我が學界の重鎮であつた。九大を去られたことは學府に取つて一大損失であつたこと云ふ迄もないが無欲恬澹にして然も研學の熱愈々熾なる先生が學界の耆宿として尙今後學界に裨益せらるること大なるは期して俟たる所である。尙先生は中僧正として松山市道後に在る名刹石手寺住職の要位に在り、長年宗教界にも多大の功績を残され、今後も同寺にあつて専ら教界に盡粹せられる筈である。最後に先生の此れ迄に於ける學術上の一端を示す爲めにその御論文題目を掲げる筈であつたが調査未だ不充分の爲め、追つて完成を見た上更めて本誌に掲載することとする。(日野記)

### 昭和十九年度秋季例會

昭和十九年度秋季例會を、十月二十九日三畏閣に於いて催す。本期例會は時局下交通その他の困難を考慮して福岡縣内居住會員にのみ通知し縣外會員には通知を取止む。依つて例年の如き多數の會員の参加は望まれなかつたが盛會であつた。

#### 講演會

- 一、遠代日本人の渡瀆に就いて 日野助教授
- 一、明治維新と商業變革 宮本助教授

#### 明治維新と商業變革

宮本助教授

決戦下未曾有の變革にあたり、企業の整備統合は既に一段落をつげ、總ては一應轉換を遂げ、嚴然たる配給統制の下、全く配給部面は變貌した。かかる現實に對し、温故知新の立場より、明治維新時の商業變革、その混亂の中を如何に力強く當時の商業者が切りぬけて來たかを窺はんとし、幕末に於ける商業の混亂、特に開國以後に於ける語色高値、配給過程の紊亂を明らかにすることより説き初め、御一新に際しての政情の騷然、銀目癡止、御用金・藏屋敷の廢止、藩債の處分等が商業及び商人に與へたる打撃、その苦惱を概説し、特に株仲間解放が、商業組織の上に如何に決定的な影響を及ぼしたかを、大阪・京都・江戸の事例に基きて解明し、以て當時の商業變革の中に現段階に處いての示唆を窺はんとする。

#### 研究發表

- 一、ヴォルテールの「ルキ十四世紀時代史」成立事情に就いて 巖井助手
- 一、眞木和泉守の體質に就いて 王丸勇
- 一、飛天と唐草 竹岡助教授

#### 國史關係事項

#### 卒業生論文發表會並近藤君壯行會

本年度卒業生たる竹田正丹君の論文發表會を時節柄同君の送

別會と十月十日に熊本豫備士官學校に特別甲種幹部候補生として入校される一年生の近藤典二君の壯行會を兼ねて、八月二十四日第二學生集會所五號室にて催す。竹岡君の卒業論文題目は「大勢三轉考に就いて」。同君の一年に亘る營々たる研究を二時間亘つて聞く。終つて近藤君の壯行會に移り、竹岡教授より此の非常時局と學生との關係に就いて大いに啓發される話を種々承けたまはる。

### 井上大學院特別研究生の歸學

六月十五日勇躍應召された國史研究の大學院特別研究生井上忠氏は、九月廿三日無事召集解除にて歸學され、再び國史研究室にて研究を續けらる。日本科學思想を研究される氏にとつて三ヶ月に亘る軍隊生活は、同氏の研究に一つの示唆を與へるものがあつたやうである。

### 研究發表會

十月十日熊本豫備士官學校に特別幹部候補生として入校される一年生近藤典二君研究發表會を十月三日演習室にて催す。研究題目「幕末に於ける眞木和泉守の位置」約一時間半に亘つて、幕末尊王攘夷論者の中に於ける眞木和泉守の主動的な位置に就いて研究を發表さる。

### 新入學生觀迎會

十月十二日、昭和十九年入學々々生觀迎會を兼ねて志賀島史蹟

集報

見學を催す。その日絶好の秋晴にて船中竹岡教授より我國古代に於ける此の地方の話を聞く。午餐前に志賀島神社を拜し、それより山越にて勝馬に向ふ。竹岡先生の相變らずの健脚に一同汗だくになる。午餐を松屋にてとる。久しぶりの海幸を食膳に眺めて一同談ず、食後金印發掘記念碑を見て歸路につく、

参加者 竹岡教授、古賀副手、井上研究生、學生、高橋君、山口君、松澤君、新入學生、松本君、常松君、疋田君、安藤君、

### 安藤君壯行會

昭和十九年十月入學の安藤君に榮ある御召來る。十二月十八日第二學生集會所に於いて同君の壯行會を催す、

### 西洋史學研究會

Christian Waas: Mithras und Wodan

(Preussische Jahrbücher, 214, 1927)

(ミトラスとヴォーダン)

松垣裕

ペルシャの大陽神ミトラス(又はミトラ)崇拜は古代東方諸國家を支配し、又キリスト教が國教として絶對的な勢力を獲得する以前のローマ帝國領内に於ても決して輕視すべからざる布

教力を持つてゐたが、この宗教が、ローマ帝國內の古代ゲルマン人にどのやうな形態で傳へられてゐたかと云ふことに就いて、ウァースは、紀元後二・三世紀頃のミトラス神崇拜を示す幾多の史料の中、一九二六年獨逸オーデンヴァルト(Odenwald)北縁の小都市ディーブルグ(Dieburg)に於て、フリードリヒ・ベーン(Fr. Behn)に依つて發見せられたミトラス神像を資料として興味ある考證を行つてゐる。これは十二面に分割せられた浮彫の神像であるが、嘗てミトラス神像として發見せられたものとは全く異つて、馬に乗り弓をひき絞り、三頭の犬を隨へて森を驅ける獵人として描かれてゐるのである。従つて、この神像は果して眞のミトラスを象徴したものであるかといふ問題が起る譯であるが、ミトラス神崇拜が嘗てギリシヤ・ローマの地に於て支配的宗教の神々、即ちアポロやキリストと同別にミトラスを位させ、以てそれらの宗教を包含しようとする傾向を持つてゐたことから推論して、ディーブルグのミトラス神像は明かにローマの商神マーキュリイ(メルクリウス)であると結論せられる。而もマーキュリイがゲルマン人の間ではヴォーダンであつたことは疑ひもない事實であるから、このミトラスは即ちヴォーダンであるといふ判断が下されるのである。ローマ帝國內のゲルマン人の宗教形態の一つを示すものとして、極めて示唆に富んだ論文と云はねばならない。

## 七月革命に關する二三の史料に就いて

讀 井 鐵 夫

七月革命勃發の日たる一八三〇年七月二十七日、二十八日、二十九日、これを史上に「光榮の三日」(Les trois Glorieuses)と呼ぶバリケードに駆けつける若者達、三色旗を打ち振るガヴロシユ、屋根裏部屋の花鉢の間に身をかどめるミミ・パンソン、或はまた豪華な馬車を驅つて亡命の旅路に急ぐ老王シャルル十世。かのドラクロアの名畫「七月革命の圖」を初め當時の石版畫の多くが革命勃發の際の巴里の状況を躍如として描いてゐる。

「光榮の三日」、それは正しく一王朝の終焉を意味し、これを記念するため巴里の市民は往時のパスチューの廣場に青銅の圓柱「七月の圓柱」を建てた。

七月革命の由つて來る複雑なる諸原因は革命そのものゝ推移とは別に深く探求する必要のあることは謂ふまでもないが、該革命の特質、その後に来る七月王朝の特異なる性格を理解するために革命の三日間とその後の事件の推移を詳しく觀察することが必要である。

七月革命の經過に關しては勿論重要な諸種の備忘録、回想録の多くを参照すべきであるが、これらは現在悉く我々の入手し難いものであり、僅かに、我々の座にあるルイ・フラン、ゲルヴィヌス、ヒルレブランド、ヴィクトル・デュプレ、ヌーヴェイヨン等の七月王朝史を参照し得るのみである。その内ルイ・ブラ

ンの名著「十年史」第一卷の革命の敘述は著者の傾向を常に念頭に置きつゝ讀めば甚だ有益であり、同じくゲルヴィヌスノ名著「十九世紀史」中の七月革命の敘述は(同書佛譯本第二十卷第二十一卷)著者が當時の凡ゆる種類の根本史料を涉獵して記したもので最も信頼に値する且最も詳細な七月革命史の一つである。茲に紹介したいものは九大西洋史研究室所蔵の七月革命に關する三つの重要な文獻である。

その一つは當時の議員たりしデュバンの書いた「七月革命」(一八三〇年刊)てこれはデュバンの演説を中心として種々の重要な演説、法令の類を網羅せる貴重な史料集である。他の一つは、「數人の目撃者による一八三〇年七月二十六日、二十七日、二十八日、二十九日及びその後の巴里の諸事件」(一八三〇年ブリッセル刊) (Événements de Paris des 26, 27, 28 et 29 juillet 1830 et jours suivans par plusieurs témoins oculaires Bruxelles 1830) と題する全文一七六頁の小冊であるが、これは革命の目撃者による生々しい記録として一讀の價值ある文獻の一つである。次に最も我々の興味を唆るものは、「七月革命を目撃せる一獨逸人の巴里よりの書翰」(一八三一年ハンブルク刊)と題する Briefe aus Paris geschrieben während der großen Volkswoche im Juli 1830 von einem deutschen Angehörigen an seinen Freund in Deutschland. Hamburg 1831. Bei Hoffmann und Campe.) これは一八三〇年七月二十日、二十一日、二十五日、二十六日、二十七日、二十八日、二十九日、三十

日、八月三日のそれぞれの日付を有する九通の巴里より在獨の友人に宛てた書翰よりなる全文一〇三頁の小冊子である。筆者は匿名の一人獨逸人であるが、書翰中に當時巴里在住の英國の某高官の知己であると記されてゐる點より見て當時の相當の人物であることが知られる。

「かくて私は注目すべき事件の目撃者として再びこの都市にやつて来た」云々に始まる七月廿日の第一翰を初めとして第三翰までは七月革命勃發に至るまでの諸事情に關する一般の考察であり、最も重要なものは革命の導火線となつた四箇條令發布の日たる七月廿六日付第四翰、及び「光榮の三日間」たる廿七・廿八・廿九日の日付を有する第五、第六、第七翰、であり、次いでオルレアン公ルイ・フィリップ出馬の日たる八月三日付の第九翰に至るまで革命中の巴里の状態に關する精彩ある叙述を含み、可なりの名文を以て綴られた七月革命に關する生々しい記録であり、目撃者、それも比較的公平な一外國人による記録として該革命に關する貴重な根本史料として参照に値するものである。これに就いては他日詳しく紹介する機会をもちたいと思ふ。

Karl Gottfried Hugelmann: Mittelalterliches und modernes Nationalitätenproblem. (Zeitschrift für Politik, 19, 1930)  
(中世および近世の民族問題)

小林 榮 三 郎

論者フーゲルマンはまづ、民族問題や國民的國家の思想をも

つて近世特有の現象なりとする見解がひろく行はれ、甚しきに至つては國民的感情・國民意識すらルネサンス期以後の所産となす者があるけれども、これらはいづれも謬見であると斷ずる。すなはち盛期中世に國民的感情の存在したことはワルター・フォン・デル・フォーゲルワイデをはじめ多くの作家によつて明かであるし、ザクセン・シュビーゲルはボヘミア王が帝國諸侯の一員たるにもかゝはらずドイツ人ならざるの故をもつて彼にドイツ國王選舉權を否認してゐる。またトマス・アクイナスも（アリ

ストテレス政治學註解第二課）民族的に統一ある國家こそ最適當のものであると論じてゐた。かくてフーゲルマンによれば中世においても民族問題はすでに存在したのであるが、たゞその取扱ひ方に大きな相違があると三つの要目を擧げて詳論してゐる。第一は、今日の民族問題において中核的地位を占むる言語問題が、中世においては（皆無ではないが）重視されてゐなかつたこと、第二は、近代國家が教育施設や社會的救済など民族の利福増進に努めてゐるのに反して中世の國家にはかうした方面に見るべきものゝ極めて乏しいこと、第三に、中世の國家（特にドイツ王國 *das deutsche Königreich*）はその内部が分節されてゐてヴェンデ族やチエッコ族のやうな異分子にも行動の自由が許されてゐたので民族問題が尖鋭化しなかつたこと。以上フーゲルマンは中歐なかんづくドイツを中心として論じてゐるのであるが、たしかに國民的感情や民族的相連の自覺は中世においても或る程度まで存在してゐたけれども果して「民族問題」No.

*Staatsrechtsproblem* と稱するに足るものが有つたか否かは異論の餘地があらう。また民族の本質に關する認識の深淺、キリスト教的世界觀・人間觀の影響などにもほとんど觸れてゐないことは遺憾であるが、中世における民族乃至國民の問題を考へる上に教ふるところ少からぬ論攷である。

史學關係講義題目 (自十月至三月)

國史、日本思想史

日本書紀演習

上代ノ諸問題

東洋史

支那古代史概説(前期ノ續)

新唐書渤海傳ノ研究

西洋史

古ゲルマン研究發展史

Ranke: *Das politische Gespräch und andere Schriften.*

臨時講義

國史概説

其他ノ關係講義

日本法制史

西洋法制史

竹岡教授

竹岡教授

日野助教授

日野助教授

小林助教授

小林助教授

梅田 育太郎氏

金田 教授

武藤助教授

廣島高等師範學校教授

日本繪畫史  
 上代文學卜風土  
 祝詞研究  
 支那文學史  
 西洋經濟史

矢崎 教授  
 高木 教授  
 高木 教授  
 松枝 助教授  
 宮本 助教授

九州史學會 本年度委員

顧問

委員長 常在委員

委員

書記

長	長	重	竹	日	小	鏡	讚	古	松	李	古	松	古	收
壽	沼	松	岡	野	林	山	井	賀	澤	允	川	垣	松	收
賢	賢	俊	勝	開	榮	鐵	鐵	平	美	雨	新	垣	松	收
海	海	章	也	郎	郎	猛	男	七	作	雨	平	裕	松	久